

第2回地球環境専門部会議事録（案）

日時：平成 15 年 10 月 29 日（水）14：00-18：00

場所：海洋科学技術センター東京連絡所

出席者

専門部会長：多田隆治（東京大学；専門部会長）

委員：伊藤 孝（茨城大；ESSEP 委員），大河内直彦（JAMSTEC；ESSEP 委員），長谷川 卓（金沢大；ESSEP 委員），林田 明（同志社大；ESSEP 委員），保柳康一（信州大）

オブザーバー：小玉一人（高知大；ESSEP 委員），奈良岡 浩（都立大；ESSEP 委員），Richard Jordan（高知大；ESSEP 代理委員），高橋孝三（九州大；iESSEP co-chair），北里洋（JAMSTEC；地下圏微生物専門部会長），青池 洋（JAMSTEC；CDEX），江口暢久（SAS オフィス）

コンソーシアム：井龍康文（東北大；コンソーシアム執行部），巽 好幸（JAMSTEC；コンソーシアム執行部），徳山英一（東京大学；コンソーシアム IODP 部会長），斎藤実篤（JAMSTEC；IODP 部会長補佐）

事務局（AESTO）：山川 稔（科学掘削推進部長）

議事に先立ち，参加者の自己紹介が行われた。

引き続いて，多田専門部会長により，当日の部会の趣旨（主に以下の二つ）について説明がなされた。

- ・ 地球環境専門部会（以下，部会）の目的・任務の確認
- ・ Boulder で行われる科学立案評価パネル(SSEPs)会議で予想される議題、議事進行についての確認と対応

議題

1) 部会の目的と任務についての確認（多田）

- ・ 資料 1 の部会会則，特に第 2 条に基づき確認を行った。
- ・ 「乗船研究者の推薦・育成を行う」という項目も部会の役割として会則に加えるべきとの意見があった。

2) SSEPs の構造と役割（多田）

- ・ 特に新しいパネルメンバーのために SSEPs の構造と役割、メンバーの心構えについて説明がなされた。

・各 SSEP の人数構成（米 7 + 日 7 + 欧 3 + 1）の現状と今後の可能性について説明がなされた。

3) SSEPs 委員の心得についての確認（多田・斎藤・巽）

- ・資料 5 の IODP/iSSEPs の活動報告（「山本レポート」）に基づき、SSEPs 委員の心得について確認を行った。特に強調されたのは以下の点である。
 - SSEPs 委員は一科学者として、あくまでサイエンスとして、プロポーザルを評価する。
 - 評価をする上でプロポーザルのヒストリーの認識し、評価の一貫性を維持することが重要である。
 - SSEPs 委員の一科学者としての独立性と、我が国の掘削科学を支援するという役割のバランスを保つことは重要である。
 - 「将来、SSEPs 委員がプロポーザルを書くための準備として、SSEPs 会議に参加している」という意味もある。

4) SSEPs 会議におけるプロポーザル評価の進行についての説明と確認（多田，高橋）

- ・新しいパネルメンバーのために、従来の SSEPs におけるプロポーザルの評価プロセスについて、具体的な説明がなされた。特に、watchdog は自分が担当するプロポーザルの評価のみならず、他の watchdog が公正に評価を下しているかについても注意を払い、もし逸脱している場合には正す必要がある事が強調された。
- ・SAS オフィスの江口氏から SSEPs 委員の守秘義務に関する説明がなされた。

5) iSSEP において顕在化した問題点（高橋）

- ・高橋前 iESSEP 共同議長から、iSSEPs において顕在化した問題点に関する説明があった。特に、英語圏からの委員の発言力が大きくなりがちな点、これに対する対策としての SSEPs 委員数の見直し、少人数会議形式の試みについての説明がなされた。

6) J-DESC 執行部の SSEPs の役割に関する認識と今後の考えられる展開について（徳山，巽，斎藤，北里）

- ・コンソーシアム巽氏から、J-DESC Letter を出した背景について説明があり、iSSEP で顕在化した問題点を抜本的に是正するために 2003 年 7 月に J-DESC Letter という形で、4 つの提案（資料 6）を行った事、その後の会議で、提案の 1 と 3 については合意をみた事、2 と 4 については否定的な意見が多く、先送りされた事、今後 J-DESC 全員でサポートシステムを作っていく事、走りながら体制を修正し、改善していかざるを得ない事が説明された。
- ・多田委員長および SAS 江口氏より、現 SSEPs における External Review の役割と現状に

についての説明があり、プロポーザルが熟成していない時点で External Rev.へ出すと proposal を駄目にしやすい事、現時点では External Rev.はほとんど引き受け手がなく、この状況で External Rev.を増やすことは難しいこと、External Reviewer List を充実される事が急務である事が指摘された。

- ・ 今後、SSEPs の構成等に関する議論が、SSEPs 内でなされる可能性を想定して、SSEPs 会議構成に対する各出席者・部会の認識を一人一人披露してもらった。特に、意見の統一は行なわれなかったが、「現状では deep biosphere panel をつくることは現実的ではなく、数年後の可能性を探る、当面は I と E に少しずつ B の委員を加えることとする」という地下圏微生物部会の見解とおおむね整合的な意見が多かった。
- ・ External Rev.については、守秘義務との折り合いが難しいので、評価の初期には用いるべきではないが、今後、より柔軟かつ積極的に導入法を検討すべきであるという見解でほぼまとまった。
- ・ iSSEPs のおける conflict of interest に対する日米欧の認識の違いについて、高橋前 iESSEP 共同議長より説明があり、プロポーネントと同所属である場合はそのことを表明して co-chair の判断を仰ぎ、co-chair が認めさえすれば、退席の必要はないとの認識が確認された。

7) CDP について (巽)

- ・ CDP について、それが何であるか、IODP における位置づけ、CDP であるための要件、等について説明がなされた。SSEPs は CDP の umbrella proposal の CDP としての妥当性を評価して、その結果を SPC に上げ、SPC が最終的にそのプロポーザルが CDP として扱われるべきかを判断する事、判断が下された後は、SSEPs は、CDP を構成する個々の proposal を他の一般の puroposal と同様の基準で評価、育成すべきことが説明された。
- ・ また、CDP の定義は現在も SPC の中で揺れており、取り扱いのガイドラインは出来ていないこと、Chikyu-JR のみならず、MSP-JR を使った proposal も CDP となりえる事も説明された。

8) プロポーザル#477 の扱いについて (高橋・木川)

- ・ ODP より IODP への引き継ぎ過程に問題があった可能性があるプロポーザル#477 について、その経緯と iSSEPs における扱いの問題点に関して proponent の高橋氏より説明がなされ、それを受けて議論がなされた。
- ・ それに基づき、評価の際のガイドライン作りが不可欠であるとの認識にいたった。
- ・ また、Boulder において日本側から #477 問題を議題としてあげるべきであるとの意見が出された。

9) Boulder 会議に向けて (多田, 井龍)

- ・ Boulder での会議にむけて出席するパネルメンバーが留意しておく点について以下の点が指摘された。
 - SSEPs の人数構成については, 次の Boulder 会議においても議論がなされる予定であるので参加者は上記 6) の議論を参考に、自身の意見をまとめた上で出席する必要がある。
 - 次回以降の SSEPs 会議の受け入れについて準備をしておく。もし次回の開催が日本ということになった場合, 細かな場所については日本側預かりとする方針で臨む。
 - SSEPs の構造と運営に関する WG に 14 名の SSEPs 委員をどのように配属させるかについて、専門部会長を中心に他の該当専門部会と連携して検討を進めることとなった。

10) 今後の IODP 乗船に対する取り組み (多田・巽) d

- ・ 資料 8-1 (p.26) に基づき, 今後の乗船体制に対して意見を交わした。
- ・ 各 Leg ごとに co chief 一名, 研究者 10 名を乗船できる権利を有している。
- ・ ただ漫然と 10 名を選択するのではなく, 専門部会において「どのようなサイエンスとするか」の方針を決め, プロジェクトとして機能するように人選を行う。
- ・ IODP がすべて動き出した場合, 日本から co chief を年間 4~5 名, 乗船研究者を 60 名程度出す必要がでてくる。人材の育成が急務である。

付記

日本の ESSEP 委員の代理委員 (Alternate) が完全確定していないので, 次回の SSEPs 会議までに確定させる必要があるとの指摘がなされた (井龍)。